

横浜市 歴史博物館 NEWS 21 2005・9

- ◇開館10周年記念特別展「よこはまの浦島太郎」によせて
- ◇秋の体験学習
- ◇<研究余話>「諸岡五十戸」木簡の語るもの
- ◇収集・収蔵資料の紹介[21] 唐箕
- ◇<常設展示室探検> 縄文時代のアクセサリ
- ◇エドゥケーターって何?
- ◇<ちよいとミュージアムショップたいむ> 新商品紹介「まいぎり式火起こし器」
- ◇<知ってますか?> 図書室のロッカー



開館10周年 記念特別展

よこはまの浦島太郎 によせて

横浜市に浦島太郎の物語が伝わっていることをご存じですか？

神奈川県には明治時代に入るまで、観音寺（観音寿寺）という寺院があり、浦島太郎が竜宮より持ち帰った観音像を本尊としていたため「浦島寺」と呼ばれていました。明治初年に浦島寺が焼失して以降、観音像と浦島大明神像・亀化龍女神像（乙姫像）は、同区の慶運寺内浦島観音堂に祀られています。この観音像について元禄八年（一六九五）の増上寺（東京都港区芝公園）の記録には「浦島太郎所持之観音像」とあり

ます。浦島寺の観音像は、江戸時代のはじめから浦島太郎ゆかりの仏像とされてきたことが分かります。

この浦島寺の由来を記した略縁起は数種類確認できますが、それらは私たちが親しんできた浦島太郎とはすこし違った内容を持っています。要約すると、三浦半島出身の浦島太夫は丹後国（京都府）に赴任し、その子ども太郎が乙姫の化身である亀を釣り竜宮城に行きます。竜宮ですばらしい日々を過ごして帰郷する太郎に、乙姫は玉手箱と観音像を手渡します。丹後国に戻つ

た太郎が両親の不在に驚いて観音菩薩に念じると、夢に現れた観音菩薩が太郎に三浦半島に行くよう告げます。太郎が観音像を背負って向かうと、横浜の神奈川付近で両親の墓を見つけました。そこで太郎はお堂を建てて観音像と玉手箱を安置しました。

これが浦島寺のはじまりだ、というものです。略縁起の成立年代によって内容には若干の変化があり、たとえば堂を建てた太郎がそこで八千歳の長寿を得た、というものもあれば、後に浦島と乙姫が共に人々の守護を約束したというものもあります。その

浦島大明神

龜化龍女神



武州樹郡神奈川別當所護國山觀音寺

浦島観世音三尊別仏（江戸時代、個人蔵）

時々の社会のなかで、物語は少しずつ改編されて伝わってきたようです。もちろん浦島太郎は、もともと京都府の丹後半島に伝わる伝説で、その歴史はふるく神話の時代に遡ります。その後によくの文学や芸能等の題材にされ、物語は全国各地に伝播

して独自の要素が付け加えられていきます。よこはまの浦島太郎もそのような物語の一つです。しかし、数種類もの略縁起をはじめとする多くの資料が遺る浦島伝説の地は、丹後半島を除いてほとんど他に例をみません。その意味で、よこはまの浦島太郎は希有の存在といえるでしょう。

では、そうしたよこはまの浦島太郎は、いつの時代から横浜に根付いていたのでしょうか。確かな記録はありませんが、略縁起の一つの末尾には「この略縁起、延徳二年ノ古版天明に再版ス」とあります。延徳二年は室町・戦国時代の一四九〇年で、天明とは江戸時代の一七八一〜八九年のことです。わずかな資料から判断することは困難ですが、浦島寺の観音像が江戸時代初めの増上寺の記録に載るところからも、浦島太郎の物語は少なくとも中世末期の十五世紀末頃には横浜の地に定着し、浦島寺も存在していたといえるのではないのでしょうか。

江戸時代に入ると、浦島太郎は様々な草双紙や浮世絵の題材となります。江戸近郊であるよこはまの浦島太郎の記録がおおくみられるのもこの頃からです。また浦島寺が焼失した後も浦島太郎は語り継がれて今日に至っています。

展覧会では、よこはま独自の浦島太郎にかかわる事柄と、一般的な浦島太郎に関する物語の歴史や、文学・信仰などの諸側面を時代を通してご紹介します。

会期 十月二三日(土)〜十一月二七日(日)

(阿諏訪 青美)

秋の体験学習

横浜市歴史博物館では、大塚・歳勝土遺跡公園内の工房で、毎年春・夏・秋・冬に体験学習を実施しています。体験を通じて、自分たちの住んでいる地域の歴史を少しでも身近に感じていただけるよう、博物館ではさまざまなメニューを用意しています。

この体験学習について、来館者の方から「くわしい内容はどんなものですか？」というお問い合わせを受けることがありますが、そこで今回は、この疑問にお答えしつつ、これからはじまる秋の体験学習を紹介したいと思います。



土偶づくり

風を受けてくるくる回るかざぐるま。竹を編んで作ります。博物館のあるあたりでは、明治から昭和のはじめ頃にかけて、タケノコづくりがとて盛んでした。ご存じでしたか？ 竹を編む作業はちよつと大変で、実はスタッフも毎年練習していますが、大変だからこそできた時のうれしさは格別です。

◎風車づくり

おもに縄文時代、人や動物の形を土で作ったものを土偶といいます。博物館でも土ながら作りますが、でき上がりはみんな違う表情になります。完成した土偶は、工房で約一か月乾燥させ、一月に野焼きをしてからお渡しします。野焼きは大塚・歳勝土遺跡公園で行い、どなたでも見学自由です。

◎土偶づくり

ぞうり編みの三つです。参加の対象は、小学生とご家族です。

◎ぞうり編み

わらを使って作ります。編み方をおしえてくださる先生方は、港北ニュータウンに昔から住んでおられるおじいさん、おばあさん。まさに地域の歴史を知るのにぴったりな体験学習です。先生方に、ぞうりの編み方だけでなく、ちよつと昔のくらしのことをたずねてみても、楽しいかもしれません。

体験学習は博物館の開館当初から実施されていましたが、開館から一〇年たち、おかげさまで多くの市民の皆さまに知っていただけるようになりました。うれしい反面、参加申し込みが定員を超えてしまうことも多くなりました。そのような時は抽選となり、ご期待にそえなくなってしまうこともあります。お詫びを申し上げるとともに、なにとぞご理解の程よろしくお願いたします。

さて、体験学習当日です。受付がおわると、まずスタッフが、つくるものの歴史についてわかりやすく解説します。そしていよいよ製作開始。これまでの参加者の方は皆、真剣な顔で取り組み、できあがった時にはうれしい笑顔を見せてくれました。これまで博物館の体験学習に参加したことのない方も、何度も参加して下さった方も、この秋、横浜の歴史を身近に感じてみませんか？

(小林 紀子)



ぞうり編み

①土偶づくり 10月8日(土)、9日(日) 野焼き11月12日(土)

②風車づくり 11月19日(土)

③ぞうり編み 11月20日(日)

対象：小学生(親子参加可)

開始時間：午前の部 9時30分、午後の部 13時30分

所要時間：約2時間

参加費：1人300円

定員：各回30名

会場：大塚・歳勝土遺跡公園内 工房

応募方法：往復はがきに参加したい方全員の名前・住所・年齢(学年)・電話番号・参加したい体験の名前・午前か午後かを書いてお送り下さい。はがき1枚1家族、1体験まで。定員を超えた場合は抽選。

締切：①9月27日必着、②③11月4日必着

もろおか ごじゅつこ

「諸岡五十戸」木簡の語るもの

一、国・郡・里(郷)制と横浜地域

日本の古代国家は、大宝元年(七〇一)制定の大宝律令では、地域行政システムとして国・郡・里制を採用しました。国は現在の都道府県、郡は市にたとえることができます。国には国司、郡には郡司という役人が配され、国府・郡家という役所が置かれ、地域支配の核となったのです。この国・郡のもと、地域に居住する人々は「戸」に編成され、戸籍に登録されました。戸は五〇戸で一里とされ、里ごとに代表者である里長が置かれたのです。この国・郡・里という体制は、霊亀元年(七一五)に変更されます。これまでの里を郷に変え、一郷を二・三の「里」とする、国・郡・郷・里という体制となったのです(ただし、この変更時期は霊亀三年(七一七)であるとする見解もあります)。さらに天平一年(七三九)頃に、郷の下の「里」が廃止され、国・郡・郷という体制へと変化したのです。このような郷・里の変遷は、宮久保遺跡(綾瀬市)から出土した「鎌倉郷鎌倉里輕馬□寸福天平五年九月」と記された木簡(マ調庸布の「天平勝宝八歳(七五六)十一月」・「武蔵国橋樹郡橋樹郷刑部直国当」という墨書銘から、神奈川県域の武蔵国・相模国でも確実に実施されたことがわかります。

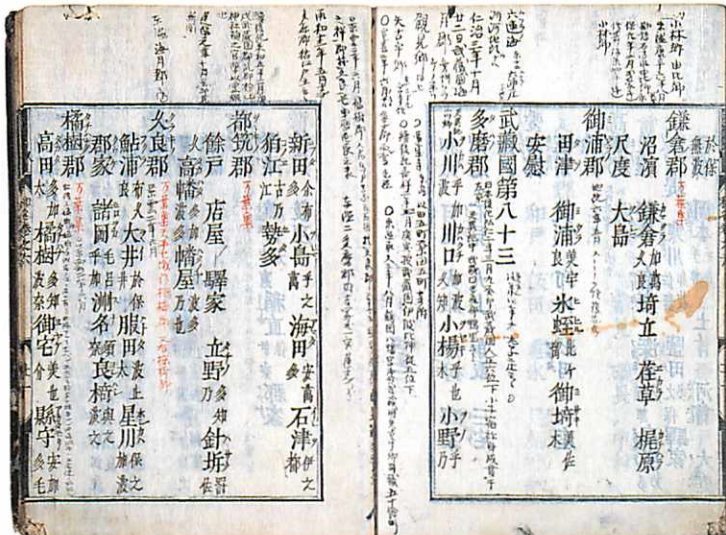
現在の横浜地域は、こうした古代の地域行政システムでは武蔵国の都筑郡と久良郡を中心とし、橋樹郡の一部、さらには相模国高座郡と鎌倉郡の一部に及んでいました。郡・郷の構成に関しては、一〇世紀に成立したとされる「和名類聚抄」により網羅的に知ることができ、写本により多少の異同がありますが、それによれば、都筑郡・久良郡の郷は次のとおりです。

- 都筑郡—余戸・店屋・駅家・立野
- 針所・高幡・幡屋
- 久良郡—鮎浦・大井・服田・星川
- 郡家・諸岡・洲名・良崎(檜)

この「和名類聚抄」のデータは平安時代初期のものとして推定されているので、八世紀の様相は異なっていた可能性もあります。しかし武蔵国分寺の文字を記した瓦から、都筑郡立野・針所郷、久良郡大井郷・諸岡郷は八世紀に確実にあったことがわかります。また、これらの郷がどの地域に当たるのかは、地名の類似で比定する方法にたよらざるを得ず、多くは比定が困難です。その中で、都筑郡では店屋郷が「延喜式」にみえる「店屋駅」の所在郷であり、東京都町田市鶴間(町谷の地名がある)とからこの周辺、針所郷は地名から

緑区西八朔町・北八朔町に比定できます。久良郡では諸岡郷は後の師岡保のつながりから、港北区師岡町および鶴見区西部に比定され、星川郷は旧都筑郡星川村(保土ヶ谷区星川)が古代では久良郡に属していたと考えることにより比定できます。

それでは、大宝律令以前、七世紀代の地域支配システムはどのようなようになっていたのでしょうか。



「和名類聚抄」郡郷部 武蔵国の郡名と郷名がみえます 諸岡には「毛呂乎加」とふりがなが記されています

ようか。それを教えてくれる資料は、七世紀代の遺跡から発見される木簡です。とくに飛鳥京に関連する石神遺跡からは、横浜地域に関係する「諸岡五十戸」と記された注目すべき木簡(以下、「諸岡五十戸」木簡)がみつかっています。

二、石神遺跡と「諸岡五十戸」木簡

奈良県明日香村の石神遺跡は飛鳥寺の西北に位置しており、一九八一年からの奈良文化財研究所による継続的な発掘調査により、遺構は大きくA期(7世紀前半から中頃)、B期(7世紀後半)、C期(7世紀末)に区分されます。A期は石敷き広場や東西に並ぶ大規模な建物群が展開する二つの区画、石敷の井戸・石組の方形池があり、北側には倉庫群が並びます。「日本書紀」には斉明天皇の時代に、「飛鳥寺の西」において須彌山を立て、蝦夷・卑人・多禰嶋(種子島)人・靑貨羅(墮羅・肅慎)などの異民族を招いて饗宴・祭儀を行っていたことがみえ、この饗宴の場がA期の遺構に相当するとされています。次のB期では、A期の遺構が取り壊されて整地され、南北扉で区画された多数の空間の中に総柱建物や南北棟建物が配置され、役所の様相を示します。C期にはB期の遺構が壊されて方形区画が作られ、その内部に建物・井戸が点在します。

「諸岡五十戸」木簡は、遺跡の北限に近い地区において、C期の南北溝の堆積土より出土した八三本の木簡のうちの一点です。大きさは長さ二二・六、幅二・一、厚さ三ミリメートルと小さなもので、短冊の形をしており、上下両端は丸みを帯びて切り取られています。下の部分はヒビが入り縦に三つに割れていますが、全体の形は二次的な加工がされておらず、本来のままです。表面には「諸岡五十戸」と記され、裏面には文字がありません。年月は記されていませんが、出土状況から七世紀後半のものとみられます。ここに記された「諸岡五十戸」は、他の史料では、後の武蔵国久良郡の諸岡里（郷）に該当するものの以外には知られません。まさにその前段階を示すものなのです。

三、評と五十戸、そして「諸岡五十戸」木簡

石神遺跡をはじめ、飛鳥京跡、飛鳥池遺跡

など七世紀の遺跡からは、近年、評・五十戸、あるいは単に「五十戸」と記した木簡が多数みつかっています。

評は、大宝律令に基づく国・郡・里のうち郡に先行する行政単位です。ともに「コオリ」と読めます。「常陸国風土記」には、大化五年（六四九）にそれまでの国造の領域が再編されて行方・香島・多珂・信太といった郡評がつくられたことが記されています。評には評家といふべき役所がつくられ、評造・評督・助督といった役人が置かれたのです。

川崎市宮前区の影向寺跡では、「无射志國任原評」とへう書された七世紀後半の瓦がみつかっています。影向寺は武蔵国橋樹郡に位置していますが、隣接する「任原評」の表記から、その前身は橋樹評とみられ、この瓦は武蔵国でも確実に評が展開していたことを教えてくれます。飛鳥京跡では「无耶志国仲評中里布奈大賀一斗五升」という木簡も出土しています。また、都筑郡家の遺跡である長

者原遺跡（青葉区窪田）では、細長い建物用L字型に配置する七世紀末頃の遺構があり、郡家に先行する評の役所（評家）の遺構とみることができそうです。久良郡の場合は、「日本書紀」安閑天皇元年閏十二月是月条によれば、武蔵国造の地位争いにともない、六世紀以降、王権の地域支配のセンターである「倉極屯倉（久良屯倉）」が置かれており、それを核に評がつくられたと想定されます。

一方、五十戸は評の下部単位、後の里（郷）に先行するものです。五十戸は、王権が各地の人々を「戸」に編成し、個々に籍帳に付して固定することにより集団を掌握する支配方式なのです。その先行形態は屯倉の経営にみることができそうです（『日本書紀』欽明天皇三十年条の吉備白猪屯倉の経営など）。現在まで、「五十戸」と記された木簡は一〇〇点近くを数えます。その中で最古の木簡は飛鳥京跡で発見された「白髪マ五十戸」と記されたものです。一緒に出土した木簡に大化五年（六四九）二月から天智三年（六六四）二月の間に使用された冠位名がみえることから、この時期の木簡と考えられます。また「五十戸」から里への切り替え時期は、藤原宮跡出土木簡に「癸未年七月 三野大野評阿蒲里」とある癸未年（六八三年）天武天皇十二年が一番早いものです。しかしながら、飛鳥池遺跡出土の木簡には「丁亥年若狭小丹評木津マ五十戸」と、丁亥年（六八七年）持統天皇元年でも「五十戸」の表記が引き続き使用されているのです。評の下の単位が完全に五十戸から里へと変更されるのは、持統天皇三年（六八九）六月に施行された飛鳥浄御原令以降と推定されます。また「三野国ム下評大山五十戸造ム下部知ツ従人田部兒安」のように、「五十戸造」と記された木簡もみ

られます。これは後の里を代表する里長の先行形態であると推定されます。ちなみに山上憶良の「貧窮問答歌」（『万葉集』巻五―八九二）では里長が「五十戸良（長）」と記されています。おそらく「五十戸造」は、五十戸からの物品などの貢進に際して、その代表者、保証人・責任者として木簡に名を記したと考えられます。

「諸岡五十戸」木簡の下の部分の文字は、「田皮羅」と読み、容器としての俵を想定する見解もありますが、判読が困難です。この木簡が「諸岡五十戸」からの貢進物に関わるものであるとすれば、次のような想定ができます。すなわち、五〇戸に編成された諸岡地域で生産・制作された物品が、上位の久良評へ運ばれ、まとめられて木簡が付され、飛鳥京へと運ばれ、石神遺跡の施設で消費され、木簡が廃棄されたという過程の想定です。諸岡地域では、五十戸造の指揮下で生産・制作された物品がまとめられて久良評へ運ばれ、集積された可能性も考えられます。

たつた一点の小さな木簡ですが、この「諸岡五十戸」木簡は、七世紀後半段階で、武蔵国・横浜地域においても評の下で「五十戸」編成が行われ、それを媒介とした貢納・労働力奉仕が行われていたことを示す貴重な資料なのです。

【参考文献】

- 鈴木靖民「奈良県石神遺跡出土の「諸岡五十戸」木簡」（『神奈川地域史研究』二二号、二〇〇三年）
- 市 大樹「木簡」（『奈良文化財研究所紀要』二〇〇三、二〇〇四年）
- 森 公章編「日本の時代史3 倭国から日本へ」（吉川弘文館、二〇〇二年）
- 川崎市市民ミュージアム「古代を考えるI 郡の役所と寺院」（二〇〇三年）

（平野 卓治）



「諸岡五十戸」木簡（複製、左は復元複製資料）
「岡」の字は「四」に「止」を合わせた形の異体字

唐箕とうみ

唐箕は、風の力を利用して穀物の実と殻やちりとを選別する道具です。とくに、搗りを終えて米と粃殻とを選別する時に威力を発揮して、稲作をしていた農家には欠かせない農具の一つでした。

写真①は横浜市都筑区、開発前の港北ニュータウン周辺で使われてきた唐箕です。大正から昭和初期にかけて製作されたと考えられ、唐箕としては大型のもので、写

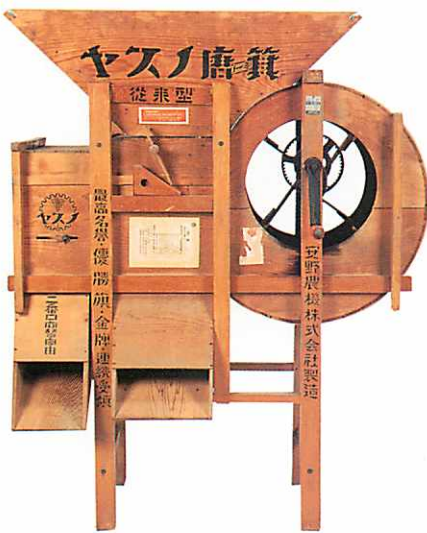


写真① 唐箕 幅167×高121×奥行61センチメートル
港北ニュータウン歴史民俗調査団旧蔵

真②は横浜市戸塚区で使われていた唐箕で、幅が短く小型です。

たいていの唐箕には米が出てくる選別口が二つついていますが、ろうとの真下であり、起こした風に飛ばされにくい重い良い米が出てくる口が一番口、その隣にあり、少し欠けたりした軽い米が出てくる口が二番口です。都筑区の唐箕は、一番口が手前向きに、二番口は一番口の左隣に後ろ向きについています。戸塚区の唐箕は写真では選別口がどちらも手前に向いていますが、二番口は後ろ向きにもできる仕組みになっています。

脚の数を見ると、都筑区の唐箕は一〇本あり、多脚構造であることがわかります。当館に収蔵されている一五台の唐箕のうち、三分の二にあたる一〇台が八本以上の多脚の唐箕です。戸塚区の唐箕は四本で最少の脚数です。都筑区の唐箕のような前後に向いた選別口と多脚構造は、横浜だけでなく、



写真② 唐箕 幅98×高120×奥行63センチメートル
小串清隆氏寄贈

東日本の唐箕の特徴です。西日本の唐箕は、選別口がともに手前を向いており、脚数が唐箕の大きさにかかわらず四本である場合がほとんどです。すると戸塚区のもものは日本の唐箕の特徴を受け継いでいるともいえることができます。

実は、戸塚区の唐箕は、一九五〇年代に四国の愛媛県にある安野農機という農機具メーカーで作られたものです。大量生産を目指したこのメーカーは西日本でも東日本でも販売できるように、二番口を前にも後ろにも向けられる構造を採用しました。安野農機に限らず、この頃大量生産された唐箕は、輸送に便利のように小型・軽量化され、選別口も前後につけ替え可能なように作られました。

一方、都筑区の唐箕は、具体的なところは不明ですが、選別口の向きや多脚構造など関東地方の唐箕の特徴を受け継いで地元職人が製作したものと考えられます。この唐箕は吹出口上部がろうとから吹出口にかけて下がったデザインですが、この形は今のところ関東地方でも都筑区周辺でしか確認されていない特徴あるものです。

農具は作物を作るための道具ですが、実は時代や地域の違いを語ってくれる資料でもあるのです。

(刈田 均)

常設展示室探検

縄文時代のアクセサリー

原始展示室の「装いの道具と自然への祈り」には、都筑区華蔵台遺跡から出土した滑車形耳飾りが展示されています。これは、耳たぶに穴をあけ、その穴にはめ込んで使われた装飾品で、その装着した様子は土偶などの表現にも確認することができます。現代のピアスにあたる耳飾りだったのでしょう。このような滑車形耳飾りは、縄文時代の後期・晩期の関東地方に多く認められます。華蔵台遺跡の資料もこの時



期です。

さらに、直径の小さいもの・大きいものが存在することから最初は小さな耳飾りをつけ、徐々に大きなものへとつけ替えたのではないかと考えられています。大きさを変える時にも、何らかの理由があったのかもしれない。

また、展示されている耳飾りは土で作られており、精緻な文様もつけられています。これらの中には赤く着色されたものも存在しています。

縄文時代のアクセサリーに対するこだわりも現代人に通じるころがあったのでしょつか。

エデュケーターって何？

博物館と学校をつなぐ

博物館では、昨年度から、授業実践や学校経営の経験者二人が、学校支援のための専任者として仕事をしています。二人はエデュケーターと呼ばれています。その仕事のキーワードは「つなぐ」です。

博物館と学校現場を「つなぐ」といっても、対象となる学校数が二〇校とか三〇校のような市では、「つなぐ」のにさまざまな方法を考えることができますが、人口三五七万人、小学校数三四校の横浜市の場合にはそう簡単にはいきません。手始めに取り組んだことは次のふたつです。

一つ目は、子どもたちが常設展示室を見学するときに参加していること。二つ目は、子どもたちにもっとも身近な担任の先生方に、博物館のことをよく知ってもらおうことです。そのための博物館利用



常設展示室で「横浜の歴史と日本の動き」を活用している場面



博物館利用研修



博物館利用研修

研修を、横浜市教育委員会と連携して実施しました。夏休み期間に常設展示室の見学のための研修、勾玉づくりなどの体験学習の研修を行いました。

こうした仕事を進めるにあたってとくに配慮したことは、博物館からの一方的な情報発信にならないようにすることです。そのため、現場の先生方に参加していただき「学校の博物館利用研究会」を設置し、検討を重ねてきました。現在は、次の段階として、「教師用のガイドブック」の作成に取りかかっているところです。

このような取り組みをしていくことで、大都市・横浜の各学校が効果的な博物館利用ができるようになることを期待しています。子どもたちに博物館の活用の仕方が理解されていけば、博物館はよりよい学習の場となっていくでしょう。それだけでなく、これが博物館と地域とを「つなぐ」架け橋ともなっていくことでしょう。(荻原 兼光)

ちよいと

ミュージアムショップたいむ Museum Shop Time

新商品紹介

まいぎり式 火起こし器



まいぎり式火起こし器 3,150円(税込)
(説明書・火きり板(2枚)付属)

今年の春からショップで販売している「まいぎり式火起こし器」。おかげさまで大好評をいただいております。腕の確かな職人さんに作っていただいているので、出来にむらがなく、どれを買っていただいても良く火がつくんです。

ということで、品質は保証つきなのですが、実は当館で扱っている火起こし器はいつも同じものとは限りません。その時々で「はずみ車(うまく回すための「おもり」の部分)に使われている木材が違うんですね。今までに使われていたのは、樫や杏や梨の木、珍しいものでは神代木などもありました。「神代木」とは長く水中や土中に埋もれた木が完全には炭化せず、木質を残して青黒褐色に変色した銘木のことで、なかなか珍しい木材なのです。その時に使われていたのは、山形県の鳥海山のおもとから出た、なんと二六〇〇年前の神代木でした。こんな木が使えるのも製作者の西野入誠一さんが長野県で文化財の修復などに携わっていらっしゃるからで、先日入荷したのもなどは、安政二年(一五〇年前!)に製作されて、長野のお宮で使われてきた山車を解体修理して出た樫を使って作られていたんですよ。

こんなところにもちょっと歴史の口マンを感じませんか?

INFORMATION

今後の企画展のお知らせ

- ◎テーマ展示「武具と刀剣」 9月17日(土)～10月10日(月)
- ◎開館10周年記念特別展「よこはまの浦島太郎―中世説話から現代まで―」10月22日(土)～11月27日(日)
- ◎「平成17年度横浜市指定・登録文化財展」「横浜の遺跡展」12月10日(土)～1月15日(日)
- ◎企画展「古代国家の成立と東国」(仮題) 1月28日(土)～3月19日(日)

表紙写真は

上矢部町富士山古墳出土埴輪 古墳に並べるために作られた焼き物が埴輪です。古墳にめぐらされた円筒埴輪、朝顔形埴輪をはじめ、馬具を飾り付けた馬、水鳥、クチバシのとがった猛禽、盾を持って護衛をする武人など様々な形の埴輪です。戸塚区の上矢部町富士山古墳は、6世紀半ば頃に造られた径約25mの円墳ですが、市域でも類がないほど多種多様な埴輪がみつかっています。

??????? 知ってますか ????????

図書室のロッカー

春から図書閲覧室の前にロッカーが設置されました。

図書閲覧室内には荷物棚はなく、以前から混雑時にはカバン類の置き場所に困り、やむをえず床に置くような利用状況でした。しかも、博物館のロッカーは1階にあり、2階にある図書閲覧室から遠く、利用者のみならずには不便をかけていました。こんな問題の対処として図書閲覧室専用のロッカーが置かれたのです。

ロッカー利用の注意点は次の通りです。①図書閲覧室を利用する際にご利用ください。②貴重品はロッカーには入れず身につけてください。③ロッカーキーをなくした場合の作製費用は自己負担になりますのでご注意ください。

ロッカーの数は10です。ノーコイン方式なので、小銭がなくてもご利用できます。お気軽にお使いください。



(2005年4月1日～2005年9月30日)

- 4月9日 企画展「幕末動乱を生きた武士―武州金沢藩士・萩原唯右衛門則嘉の生涯―」開催 (5月15日まで)
- 4月23・24日 体験学習「まがたまづくり」
- 4月24日 企画展ミニ講座「19世紀における武州金沢藩」
- 5月1日 企画展ミニ講座「萩原唯右衛門則嘉の動向」
- 5月8日 企画展ミニ講座「文書にみる藩士の生活」
- 5月11日 歴史講座「横浜の歴史」(6月15日まで連続6回)
- 5月19日 ふるさと横浜探検「国史跡登呂遺跡と芹沢銚介美術館」
- 5月28日 収蔵資料展「浮世絵・絵図でめぐるかながわの名所」(7月3日まで)
- 6月18・19日 体験学習「小田原ちょうちん」
- 6月22日 歴史講座「横浜の歴史と道」(7月20日まで連続5回)
- 7月10日 エントランスホールコンサート「ピアノと歌の午後―フランスとドイツの響き―」
- 7月16日 夏休み企画展「おなががすいた はらぺこだっ!―縄文時代のごはん―」開催 (9月4日まで)
- 7月21日 ふるさと横浜探検「国史跡朝夷奈切通と金沢道」
- 7月28・29日 体験学習「そめもの」
- 8月2・3・11日 体験学習「土偶づくり」
- 8月5日 ふるさと横浜探検「歩いて作ろう谷戸図鑑」
- 8月7・21日 夏休みれきし教室
- 8月10日 体験学習「まゆ細工」
- 8月18・19・20日 体験学習「まがたまづくり」
- 8月21日 縄文土器と土偶の野焼き
- 9月17日 テーマ展示「武具と刀剣」開催 (10月10日まで)
- 9月29日 ふるさと横浜探検「よこはま事はじめ 野毛地区を歩く」
- 9月30日 「古文書解読教室―初めての古文書―」(12月2日まで連続10回)

横浜市歴史博物館 ● 日誌

横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

編集後記

秋は一〇周年記念特別展「よこはまの浦島太郎」を開催します。親から子へ語り継がれ、童謡や紙芝居、浦島太郎。横浜にも玉手箱を開けなかつたちよつと変わった浦島太郎の物語がありました。ぜひ横浜の浦島太郎に会いに来てください。

- 開館時間
午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)
大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン
 - 休館日
歴史博物館・大塚遺跡
月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
都筑民家園
毎月第3月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。
 - 常設展観覧料
- | 区分 | 個人 | 団体
(20人以上1人につき) |
|---------|------|--------------------|
| 一般 | 400円 | 320円 |
| 高校生・大学生 | 200円 | 160円 |
| 小学生・中学生 | 100円 | 80円 |
- ◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。
 - ◆毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。
 - ◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図

横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
〔「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分〕



駐車場あり(2時間400円)

●インターネットホームページ

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

